

令和元年度 若草幼稚園自己評価

若草幼稚園の令和元年度における自己評価は以下のとおりである。

1 保育の計画性

園の保育文化（遊び、一斉活動、行事）が安定していることによって、例年と同じく一定の成果を出すことができた。特に年長児のクラス担任が保育歴2年目にも拘わらず、保育の集大成である年長児を立派に育てあげた功績は大きい。他の新人も、自己課題がわかり、自分なりにその課題に取り組んでいく姿勢が見られた。週日案も根付き、一日のまとまりを作ることができるようになっていく。

作品展への取り組みでは、主任が新人をフォローできない姿があった。計画を立てる上で、何をねらいにしているのか、そのためにどのような手続きをとるのか、きちんと説明できる状態であることが重要であり、学年として動くことの責任を改めて認識してほしい。

生活発表会への取り組みは、学年として動くのではなく、クラス単位であることから、新人にとっては、非常にきつい取り組みとなった。本番へと見通しをもち、子どもの主体性を引き出し、楽しさややりがいを持続させながら、保育を作っていくことの難しさが改めてわかった。最後の最後まで、よく粘って本番を成功に導いたので、来年は、おそらくもっと楽に、見通しを持って取り組むことができるだろう。

2 保育の在り方、幼児への対応

子どもの遊び文化が継承され、主体的な学びの証がそこここに見られるようになった。特にコマの習得率の高さ、低年齢化、鉄棒の新しい技、縄跳びの技能の習熟などは、こちらが意図したものというよりも、子ども間の憧れから生み出された学習の姿である。一方で、身体をスムーズに動かす、とっさのときに身体が動く、などの点において未熟な面があり、これから育てていく必要がある。家庭との連携をとり、自分のことを自分でする、生活をきちんと営める身体にしていくことが大切である。

幼児への対応として、まよいによる中途半端さが目立つ。日々のPDCAを丁寧に行い、やってみることで、前向きに子どもと向き合うことが求められる。

3 教師としての資質や能力・良識・適性

副担任のベテラン保育者に、多くを負う年となった。保育歴1年目、2年目では、保育に対する理解の不十分さから、何を多く負っているのかわかっておらず、大変な負担をかけた。本人たちがそれを理解するのは、数年を要する。無意識の自己中心性を意識化し、責任とは何か、自分は何が

できて、何ができないのか自覚する営みには時間がかかる。学生指導においても、著しい未熟さを感じるが、一つ一つ丁寧に向き合わせ、組織に生きる社会人として、保育者として育てていく必要がある。

ただし、どの保育者もこの職業の大切さと価値の高さを十分に感じており、手を抜かず、気を抜かず、誠実に職務を尽くしていることは確かである。

4 地域の自然や社会とのかかわり

保幼少連携事業において、小学1年生と年長児の合同授業を行った。今年は、対話形式を取り入れ、児童と幼児が直接かかわる機会を設けた。幼児にとって、小学校をととても身近に感じることができる貴重な機会となった。

地域連携協議会の役員や、地域の防災、人権イベントに協力していくことを通して、地域に根づいた活動を進めることができた。

5 研修と研究

大妻女子大学の岡先生にご指導いただき、新人保育者を支える組織の在り方について、研修を重ねることができた。新人保育者は、子ども理解の裏にひそむ自己課題に気付くことができ、ベテラン保育者は、自分たちの悩みを通して、新人保育者の支え方について互いに共通理解することができた。

また、NPO 法人減災教育の江夏さんのご指導のもと、地震に関する避難訓練の見直しを行った。具体的に子どもがイメージし、目を働かせ、身体を動かす避難訓練の在り方を学び、職員間全員での周知を図り、より現実的で実際的な避難訓練を重ねていくことができた。